

## 「エルサレムに向かう決意」（ルカ九章五一〜六二節）

### 1 新たな旅の始まり

今日の聖書が伝えているのは、イエスの新たな旅の始まり、エルサレムに向けての旅の始まりです。

イエスの神の国の宣教はガリラヤで始まりました。教え、癒やし、福音を宣べ伝えながらイエスはガリラヤ中を巡り歩いたのです。時に、ガリラヤ以外にも行ったようですが（ルカ四・四四）、基本的にはその活動はガリラヤを越えるものではありませんでした。

そのガリラヤを出て、イエスはエルサレムに向かおうとしています。

イエスは、天に上げられる時期が近づくと、エルサレムに向かう決意を固められた（五一節）。

ガリラヤからエルサレムへ、その決意を固める、この場面はマタイ（一九章）、マルコ（一〇章）両福音書とも、イエスがガリラヤを去って、ヨルダン川の向こう側のユダヤ地方に行ったと、事実をたんと書いていて、そこに何か、ルカが書いているような相当重い「決意」があったというようには書いていません。とはいえ、イエスはエルサレムで十字架にかけられ死に、生前ガリラヤに戻ってくることは実際なかったわけですから（一六・七）、メシアとしてのイエスの生涯において、ガリラヤからエルサレムへ、この時は、やはり、ある意味で、決定的な転機であったと言わなければならぬと思います。

その決意を促したのは、ガリラヤ伝道を、仕事として成し遂げた、もはややることなくなったということではありません。そうではなくて、神から、その時を知らされた、どのようにしてか、何をもってか、分かりませんが、神の御心を何らかの仕方です悟ったことによります。

悟ったのは「天に上げられる時期が近づいた」ことです。これは、直訳すれば「彼の上げられる日々が満たされる中」です。上げられるというのは、一般に、イエスの死と取ってもいいし、あるいは、復活し天に上げられる、つまり、昇天のことと考えてもいいと思います。

「日々が満ちた」という言葉は、後に使徒パウロが使っている、時が満ちるという言葉を思い起こさせます（ガラテヤ四・四、エフェソ一・一〇）。御子イエスが世に遣わされたのは、神の時が満ちたからだとして理解しています。イエスがガリラヤを去ってエルサレムに向かう、不退転の決意をもって赴く、それは決して人間的な思いから出たことではありません。御心に基づくことです。時が満ちたこと、神のご計画がいま為されようとしている、ということなのです。

さてガリラヤからエルサレムへ、と申し上げていますが、具体的にエルサレムに入ったのは、捕縛され十字架につけられるおよそ一週間前です。そこに至るまでイエスはガリラヤを出たあと、ガリラヤの南に位置するサマリアに行き、そこからヨルダン

川の東に行っています。聖書地図ではペレアと書いてあるところです。聖書の記述は、この後、ある村とか、あるところ、という書き方が多くなり、これまでのように、カファルナウムとか、ナインとか、具体的な地名は少なくなります。とはいえ放浪しているわけではありません。イエスは、弟子たちとともに、エルサレムという目的地を見据えて旅していく、十字架へ向かっていく、そのことを忘れてはなりません。

## 2 サマリア人の村で

イエスはガリラヤを去ります。そこから、いま申し上げたように、ヨルダン川の東のほうに行くのですが、サマリアを通って行きます。

ヨハネによる福音書（四章）に出てくる、サマリアのシカルという町の女、井戸から水を汲んでイエスに飲ませた女の話は、ご存じのことと思います。あのときもイエスはサマリアを迂回せず通過しています。

ここでも、イエスとその一行は、サマリアを迂回してヨルダンの東に出る、ということを経ず、ガリラヤからサマリアに出ます。

そして、先に使いの者を出された。彼らは行って、イエスのために準備しようと、サマリア人の村に入った。しかし、村人はイエスを歓迎しなかった。イエスがエルサレムを目指して進んでおられたからである。弟子のヤコブとヨハネはそれを見て、「主よ、お望みなら、天から火を降らせて、彼らを焼き滅ぼしましょうか」と言った。イエスは振り向いて二人を戒められた。そして、一行は別の村に行った（五二～五六節）。

サマリアという地域は当時ローマの行政区域の一つです。ただここでサマリア人というのは、そこに住んでいる住民という意味ではありません。昔から一つの宗教でまとまっていた人々のことです。

もともとユダヤ人なのですが、その昔、この地方がアッシリアの支配を受けてから、エルサレムを中心とするユダヤ人からは、血の純血が失われたとしてイスラエルに属するものとは見なされず、エルサレム神殿からも閉め出されていたのです。その結果彼らはゲリジム山に神殿を建てて、同じ旧約聖書に基づきながらも、独自の宗教をつくりあげていました。サマリア人からすれば、イエスといえども、「エルサレムを指して進んで行く」者など、歓迎するはずもないのです。ユダヤ人のほうもサマリア人を外国人と見なしていました。

このあと、ルカ一〇章には、有名な善きサマリア人のたとえがイエスによって語られます。少なくともイエスは、サマリア人だからといって、外国人だからといって、これを差別したりしない。ということ、ヨルダン川東部に出るのに、イエスは、あえてサマリアを通過した、サマリア人が歓迎しないことは分かっている、そこに入っていったように思います。十字架へと向かうイエスは彼らとも交わりを求めて入っていた、そのためにもわざわざ弟子を遣わして、準備もさせた。なるほどこの時は受け入れられなかったとしても、そうした拒絶を包み、それを越えるものがそこで示されたように思わざるをえません。

このイエスの思いを、サマリアに準備のため先に遣わされた二人の弟子は、分かっていたいなかったようです。すでに私どもは、前の箇所で「一人の子が人々の手に渡されようとしている」というイエスの受難予告を、理解できなかった弟子たちを知っています。へりくだりの道を歩もうとするイエスをよそに、だれが一番偉いかという議論が起こったことも知っています。

いま二人の弟子、ヤコブとヨハネが、サマリア人が、自分たちを歓迎しないからといって、「天から火を降らせて、彼らを焼き滅ぼしましょうか」というのは少し乱暴です。

彼らがこう言った背景に、旧約の歴史があります。預言者エリヤです。紀元前九世紀、北イスラエル王国の王アハズヤ、彼は屋上の部屋の欄干から落ちてけがをし、病気になるります。アハズヤは、主なる神ならぬバアルの神を信奉し、使者を送り、病気が治るかどうか、尋ねさせるのです。そのことを御使いから聞いたエリヤは王の使者に会って、イスラエルに神がいなくてもいいのかと叱責し、王は必ず死ぬ、そう伝えよと言います。それを聞いた王は兵を出してエリヤを殺そうとしますが、エリヤは天から火を降らせて退けます。そして王アハズヤのもとに行って、異教の神にたよることを叱責し、主の言葉を告げます、あなたは必ず死ぬと。神の託宣の通り、アハズヤ死んでしまいます。

この故事が、ヤコブとヨハネに思い出されたのです。しかしどうでしょうか。イエスはエリヤではないし、また私どもは、この九章のはじめで、イエスが、こう言っていたことを思い起こします。「だれもあなたがたを迎え入れないなら、その町を出ていくとき、彼らへの証しとして足についた埃を払い落とさない」（九・五）。この「迎え入れない」は先ほどの「歓迎しなかった」という言葉と同じです。ヤコブとヨハネ、彼らは、そのイエスの言葉に従っていないのです（九・三五参照）。山の上のイエスに変貌に立ち会い、「これに聞け」、すなわち、イエスに聞けと命じられたヤコブとヨハネ、それにも彼らは従わなかったことになります。

### 3 旅する神の民

今日の箇所から、イエスの新しい旅が始まったと申しました。エルサレムまで、むろんまだイエスは、教え、いやし、福音を語り伝えつづけます。それはまた、イエスと共に歩む弟子たちが、やがてイエスの働きを受け継いでいく使徒たちとして養われていくことでもあります。ヤコブとヨハネも、イエスに戒められ、イエスに従うことを学んで行きます。

一〇章の始めを見ると七十二人が使徒として派遣されることが書いてあります。ガリラヤでイエスのお供したのは十二人、それにイエスにいやしていただいた何人かの女性たちがいました（八章）。ここに来て、多くの人が、加わってきます。志願して、あるいは招かれて、イエスに従う群れが大きくなって行きます。問題は、彼らが本当に御言葉に従う、それに生きる、そういう群れとなっていくかです。それもこのエルサレムへの旅の大きな課題なのです。

一行が道を進んで行くと、イエスに対して「あなたがおおいでになる所なら、どこ

へでも従って参ります」と言う人がいた。イエスは言われた。「狐には穴があり、空の鳥には巢がある。だが、人の子には枕するところもない」(五七〜五八節)。

細かなことですが、「イエスは言われた」、ここは元の文では「彼に」と言う言葉が入っています(「イエスは彼に言われた」)。ただこれは「彼」とも「彼女」とも取れる言葉です。志願したのは女性だった可能性があります。

志願した彼、または彼女が、イエスの言葉を聞いて、従って行ったのかどうか、この後に出る二人についても、はっきり書いてありません。しかしイエスが弟子に求めたことは、それはここでははっきり示されません。

イエスに従う。従うとは、後をついて行く、同じ道を歩むということです。「人の子には枕するところもない」。「人の子」とは、もちろんイエス・キリストのことです。果たして私ども本当の意味でこれと同じに生きられるか、まさに厳しいイエスの道です。私どもも、イエスと共に旅する者として、この世の何かに、最終的な抛り所を求めず歩むこと、ただ神の養いに、荒野野に湧く水に、天からのマンナに養われること、それはできるように思われます(九・二三、二四)。

更に二人の人が、イエスに召されます。

そして別の人に、「わたしに従いなさい」と言われたが、その人は、「主よ、まず、父を葬りに行かせてください」と言った。イエスは言われた。「死んでいる者たちに、自分たちの死者を葬らせなさい。あなたは行って、神の国を言い広めないさい」。また別の人も言った。「主よ、あなたに従います。しかし、まず家族にいとまごいに行かせてください」。イエスはその人に、「好きに手をかけてから後ろを顧みる者は、神の国にふさわしくない」と言われた(五九〜六二節)。

二人には共通したことがあります。それは、従うことに優先するものをもっていることです。まるで当然のこのように、二人ともイエスに対し主張しています。それは「十戒」の五番目の戒めに、「あなたの父と母を敬え」があるからです。それを盾に取っています。しかしイエスはいうのです。イエスに従うことは、それにも優先するのだと。これも同じく厳しいイエスの要求です。

さてイエスがガリラヤを去ってエルサレムへと旅する。十字架へと向かうのであって「旅する」という日本語は、少しおかしいと思われるかもしれませんが、今日の箇所にも、「行く」、あるいは「道」という言葉が、くり返し使われていることに気がつきます。「旅する」という言葉でなくても、ともかく、イエスと共に、私どもは歩んで行くのです。

私どもの人生も旅です。この旅は、もう一度、出発したところに戻ってくる旅ではありません。向こうへの旅です。教会も地上を旅する神の民です。教会はキリストの体であるとともに、そのような旅する民です。私ども出発時点で完成しているわけではありません。イエスと共に旅し、歩む中で、ようやく完成へと導かれる、そのような、これは旅なのです。ヤコブも、ヨハネもそうでした。私どもいまは未熟でも完成へと導かれることを望みながら、共に歩んでまいります。